



6章

伝統文化・生活文化を担う

概説

新垣幸子

志田房子

祝嶺恭子

仲井間文子

比嘉悦子

宮城幸子

宮里正子

山内光子

與那嶺一子

コラム 琉球の食文化を受け継ぐ

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

9章

6章

伝統文化・生活文化を担う

本章では、伝統文化として主に舞踊、民俗音楽の分野から、また生活文化として染織および漆芸の分野で活躍する方々からの貴重なインタビュー等の記事を収載している。

照屋理(名桜大学教授)



イザイホーで円陣をつくってウムイを唱える神女たち
=1978年12月15日、久高島(琉球新報社提供)

琉球文化の発展と戦禍

『おもろさうし』は全22巻あるが、その中の第9巻「いろいろのこねりおもろ御双紙」に、「おす」、「こねる」、「おがむ」といった舞踊の手を記録したと見られる詞書(ことばがき)がある。これらは現在のいわゆる琉球舞踊に通ずる原初的な型が示されたものともされる。

また『おもろさうし』22巻には、のべ1554首の神歌オモロが収載されているが、そのうち約300首に「あおりやへがふし」(巻1—1番ほか)や「あがる三日月がふし」(巻10—531番)などの節名が付されている。これらはいわゆる音曲の名称で、現在の三線歌謡の節に近い、120曲前後にまとめられるとされる。

それらのメロディーに沿って歌われるのが神歌オモロである。歌う主体は神役女

性であり、聖なる日時に聖なる場所で、神衣装をまとして歌う。『おもろさうし』に見える神衣装の表現には「描き御羽」(巻13—843番)や「あけずみそ」(蜻蛉御衣(巻13—847番)などがあり、古琉球における“染め”、“織り”の確かな存在感を伝えている。

時に神役女性は物々しく武装をすることもあった。戦に関するオモロでは、鎧を装着し、盾や矛といった武具を持つ神役が歌いこまれている。そのオモロの歌詞で矛は「塗手矛」(巻21—1446番)と表現されている。和語において「塗り」が付く表現は「塗り足駄」(漆塗りの足駄)や「塗り板」(漆塗りの板)、「塗り桶」(漆塗りの桶)があり、基本的に漆塗りのものを意味する。「塗手矛」というオモロ表現は、古琉球に

おける漆芸の文化をうかがわせる。

古琉球期を経て近世琉球期となると、舞踊、音曲、染織、漆芸文化は、例えば組踊として、例えば三線音楽として、あるいは紅型として、あるいは日本、中国への献上品など、琉球を代表する文化に進化・変化を遂げ、さらに発展していった。そして近代、琉球処分を経験した琉球文化圏の島々では、方言撲滅運動にみられるような誤解や蔑視が固有の文化全体に及ぶ。さらに、押し寄せてきた沖縄戦の戦禍は、それでも継承されていた文化や、それを支えていた人々に対し壊滅的な犠牲を強いた。

戦後、女性が継承

舞踊の世界では、近代日本の軍国主義に巻き込まれ、多くの男性舞踊家らがその技芸とともに失われた。人も技も不在となった琉球舞踊を、多くの女性たちが支えた。その一人、宮城幸子は師である真境名佳子から受け継いだ「真踊り」の思想を守り続けた。また志田房子は「祈り」を舞踊の根源として発展させ身体表現へ昇華させた。琉球王国時代から男性によって育まれてきた芸を、女性として継承してゆくことは並大抵のことではなかった。

音曲については、例えば『おもろさうし』は、他の神歌同様に神役女性が歌い手を担っていたと考えられるが、近世琉球ではすでにおもろ主取という官職が誕生し、男性が担っていた。近代に入ると、そのおもろ主取職もなくなり、オモロの曲節は数曲を残し急速に廃れていった。戦後は主に三線音楽が盛んとなる中、比嘉悦子はその系統について初めて研究の目を向けたほか、祭祀の場でうたわれるウシデーク歌や民謡、童謡等をも研究対象とし、地域に伝承される歌を掘り起こした。また王国時代に中国からの使者を接遇した御座楽の復活・保存・継承に尽力した。染織の世界では、女子美大(東京)で柳悦孝に影響を受けた祝嶺恭子が、琉球王国時代の染織技法について、ヨーロッパま

で調査の手を広げながら古典的技法を継承している。新垣幸子は地元石垣の文化を掘り下げ、戦後、捺染が主であった八重山上布について括り染めのあったことを突き止め、失われつつあった技術を復活させた。

そのように復活した文化は、改めて沖縄の他分野を刺激し、文化的うねりを起こすこととなった。ミス沖縄の衣装を長年担当した仲井間文子は、沖縄の染織文化からインスピレーションを受け、自身の関わるファッションショーに「沖縄の染めと織り」の部門を創設、首里織をはじめ芭蕉布、上布を服飾デザインに取り入れた。ミツコハーベルのブランドを立ち上げた山内光子は、紅型などに加え漆器の意匠をも取り入れたかりゆしウェアをデザインするなどし、琉球の染織文化の普及が促された。

新たな息吹 全国で評価

2026年現在、首里織や上布類、緋、各種花織など、染織では全国で最多の13品目が国の伝統的工芸品に指定されている。復活や継承がなされた多くの染織文化を育む沖縄を、與那嶺一子は「染織王国」と呼び、王国時代の「手わざ」を蘇らせ

て新たに発展させるべく、さらなる調査・研究を進めている。

漆芸の分野では、琉球漆器および琉球の漆芸技術が制作に欠かせない三線も、国の伝統的工芸品の指定を受けている。近世琉球期に日本や中国への貢納品として洗練された漆器の制作は、近代以降に民間の工房へ引き継がれた。戦後、王国時代の技法や制作過程などの伝承が途絶え、そもそも漆樹が琉球国内に存在したかどうかすら不明な中、宮里正子は古文書にその存在を認め、さらに東南アジアへつながる琉球漆芸の比較研究を精力的に進めている。

琉球の伝統文化と生活文化を担った彼女らがいたからこそ、先人の技芸は新たな息吹を吹き込まれ、後進が育ち、今の琉球・沖縄文化がある。戦後の混乱と絶望にまみえる状況の中で、先人がともした文化の灯を絶やさないよう継承し、あるいは研究し、復活に尽力してきた女性たちの語りを、本章で確認されたい。



豊漁・豊作を神に感謝する「ウンジャミ」で、フナウクイ(船送り)の儀式をする神女(ハンズナー)ら=2012年9月3日、伊平屋島マジキナヌハンタ(琉球新報社提供)



琉球漆器に盛り付けられた給食をおいしそうに食べる伊良波小の6年生たち=2023年11月22日、豊見城市の同小学校(琉球新報社提供)



(2025年12月撮影)

新垣幸子

Arakaki Sachiko • 1945-

島の色を信じて 八重山上布の風 括染広げ、次世代を育成

太平洋戦争終戦直後の1945（昭和20）年10月、母の疎開先の熊本県で生を受け、母の故郷である現石垣市へ。高校を卒業後、八重山毎日新聞社での勤務が社会人としての出発点。その後、保険会社に勤めた。

子どもの頃から手仕事が好きだった。妹の学校卒業後、家計や世話をする必要がなくなり「これからは自分のことをやりたい」と決心した。当初は陶芸の道を志し那覇市壺屋の工房を訪ねたが「女性是一部しか担わない仕事」と言われ諦めた。染織の道を志したのは26歳の頃。首里織の染織家・大城志津子の門を叩く。作品や糸作りを見せてもらい染織の道へ進むことを決めた。

72年5月15日、沖縄の本土復帰の日に、県工業試験場（現県工芸振興センター）染織課で基礎を習得。73年、石垣島に帰り、石垣英富工房で八重山上布を学んだ。その後、自身の「新垣織物工房」を構える。

八重山上布は当時、苧麻の白地に捺染絰が主流だった。しかし、島の豊かな自然を感じながら「植物染料は豊富だから活かせるはず。八重山でも括染を」と色とりどりの上布づくりに意欲を示した。

背中を押したのは岡本太郎の『沖縄文化論』。〈明治末期に悪法が廃止され、八重山が解放されて、ここの人たちは何を

生み出したというのだろう〉との一節に「頭をガーンと打たれた」。更に八重山上布の奥義を掘り下げの後押しになった。

島の色合いを表現した上布を探求し、74年、沖展に作品を初出品。奨励賞を受賞した。

東京の日本民藝館に色彩豊かな上布があると聞き、上京時に直に確認。琉球王国時代に御用布として納められた紅や黄色の上布に「やっぱりあったんだ」と確信した。その後、沖縄県立博物館で日本民藝館の所蔵品展示が行われた際に石垣の八重山博物館に懇願して八重山関係の染織を島内で展示。色とりどりの上布が知られると、地域の風向きが変わった。「括染を学びたい」という若い世代が増え、80年、石垣市八重山上布後継者育成事業の講師を務める。83年には県工芸公募展で優秀賞を受賞した。

2人の子どもを育てながら染織に励み、次世代の育成にも努めた。自らの作品づ

くりは家事育児を終えて皆が寝静まった後、夜中に織り続けた。

89（平成元）年より県立芸術大学の非常勤講師。91年に県指定無形文化財「八重山上布」の保持者となった。その後も数々の賞や認定を受け、98年に日本工芸会正会員、そして卓越した技能者（現代の名工）に認定された。2008年から多摩美術大学客員教授。17年に県文化功労者。24（令和6）年、人間国宝に認定された。散歩が日課だ。川のせせらぎ、街中や森の緑、蛍の光など八重山の自然が作品の源となる。

遡れば中学時代に先輩、故・宮良高広氏（民俗学者、後の札幌大学名誉教授）に誘われて、八重山ハジチを調べた。子どもの頃から民俗学に親しみ「地域のは地域の人が勉強しないといけない」と語る心は、八重山上布にかける情熱に現れている。（東江亜季子）



芭蕉布の着物を着用する小浜島の女性たちと記念撮影する新垣幸子（右）=1976年8月

志田房子

Shida Fusako • 1937-

踊りは「生命あることの証し」 「平和への希求」を舞で顕現



志田房子(旧姓 根路銘)は、沖縄戦で幻と化した琉球芸能の復興に努め、今日に至る琉球舞踊隆盛の礎を築いた。舞踊の根源にある「祈り」の身体表現に高い芸術性を付与し、2021(令和3)年、真踊流の宮城幸子と共に初の国指定重要無形文化財「琉球舞踊立方」(人間国宝)に認定された。

37年、那覇に生まれた房子は、幼少期から近代の名匠玉城盛重に師事した。沖縄戦で師を失い、生き残った名人ら・仲井真盛良、田島清郷、西平守模、真境名佳子、金武良章、金城宗善、玉城盛義、島袋光裕、新垣義志から得意芸を学び、多様な演目の的確に踊り分ける表現力と創造性を培った。米政府統治下、9歳で沖縄民政府主催芸能審査会に合格し「俳優資格証明証」を取得、各地に慰問し生き残った人々を勇気づけた(『うるま新報』1947年3月14日)。作家・船越義彰はこう記す。「荒廃のなかの彷徨であったゆえに、歌や踊りという純粋無垢なものが一人、美しく、尊いもののように見えた。房子の6、7歳から10代の前半は、こうした時代であり、この痛ましい風土から若々しい、新時代を象徴する若芽のめばえーそれが房子さんであった」と。

53年(16歳)、本土復帰運動促進をめざし結成された「第一次沖縄芸能使節団」に選ばれ文部省芸術祭「琉球國劇公演」に

出演した。55年、布哇琉球古典音楽野村流泉川龍泉會および布哇沖縄人連合から招聘され、沖縄系移民に琉球舞踊を披露・伝授、62年、琉球舞踊家として初の米本土ロサンゼルス公演を果たし国際交流の嚆矢となった。

志田義則との結婚を機に東京へ転居したのは復帰前の68年。焦土と化したモノクロームの沖縄像に、紅型装束のような鮮やかな色を差していった。舞台の大小を問わず草の根の活動を継続、岩波ホール古典舞踊シリーズ等で琉球文化の発信に努めた。復帰20周年記念文化庁芸術祭公演「道成寺二題」では、組踊「執心鐘入」の宿の女を志田房子が、「京鹿子娘道成寺」の白拍子花子を坂東玉三郎が演じ、組踊と歌舞伎に共通する伝統芸能の魅力と独自性を示した。

代表作「鎮魂の詞」は、沖縄全戦没者追悼式前夜祭で初奉納し国内外で再演を重

ねた。本作の冒頭は水滴音から始まる。戦時中、身を隠した洞窟で滴る水の音を聴き、戦争の恐ろしさとともに、生きていることを実感したという。「踊ることが祈りであり、祈ることが踊りになる、踊りは生命あることの証し」と語り、戦争や飢餓で幼い子供たちが自国の文化を知らずに命を失っている現状を憂い、すべての人々が等しく文化芸術を享受する日がくることを、舞踊を通して訴えている。

房子は、戦前から戦後の激動する沖縄に育ち、上京後は東京からまなざし続け、「琉球舞踊の継承と創造」によって「魂の復興と平和」を祈る使命を全うしてきた。民族・人種・言語などあらゆる壁を超越し「世界平和への希求」を願い、類い稀な表現力と創造性で「人間にとって最も大切なものは何か」を問い続けている。

(波照間永子)



慰問公演 9歳(1947) シーツで作った衣裳(写真提供:琉球舞踊 重踊流) 志田房子作「鎮魂の詞」、沖縄平和祈念堂で初奉納(2000)、再奉納(2006)、早稲田大学(2014)、国立劇場おきなわ(2017)、ハワイ沖縄センター(2018)、国立劇場・東京(2019)(写真提供:琉球舞踊 重踊流)

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

9章



(2023年撮影)

祝嶺恭子

Shukumine Kyoko • 1937-

首里織の伝統技法を継承 創作活動なお第一線

祝嶺恭子は、1937（昭和12）年、那覇市上之蔵に生まれた。小学校に入学後、日本の戦況は次第に悪化していった。家族で九州への疎開が決まり家族で沖縄を離れることになったが、銀行に勤務していた父親だけが仕事の都合で沖縄に残った。終戦後、父親の安否を確認するために急いで帰郷したものの、家族の願いもむなしく、戦争の犠牲となっていた。それ以降、母親がミシンひとつで縫製の仕事をしながら、残された家族の生活を支え続けた。

学童期より戦前・戦後にかけて激動の時代を経験し、その後の文化や暮らしの基盤が深刻な影響を受けるなか、母親が手に職を生かして懸命に働く姿を間近で見てきたこともあり、自分も何か技術を学びたいと願うようになった。その後、さまざまな経験を通して沖縄に受け継がれてきた染織文化への深い敬意と高い志を抱き、その道に進むことになる。

56年に琉球政府立那覇高等学校を卒業後、57年女子美術大学短期大学部図工科（東京都）に入学、59年に卒業した。同年、同大学芸術学部の工芸科2年に編入し、3年間染織を学び、62年に卒業した。当時の工芸科では、沖縄の織物の研究・伝承に大きく貢献した柳悦孝（やなぎ・よしたか、1911～2003年）が教べんをとっており、この恩師との出会いをきっかけ

に生涯をかけて沖縄の染織と関わることとなる。

大学卒業後は、琉球政府立首里高等学校および沖縄県立芸術大学において工芸・染織教育に携わり、後進の指導に尽力するとともに、沖縄の染織に関する研究を重ねてきた。特に沖縄県立芸術大学では、開学当初より教壇に立ち、学生一人ひとりに織りと誠実に向き合う姿勢を伝えてきた。多くの染織作家や研究者を育成した功績は計り知れない。

また、首里に伝わる織物の美と技に深く魅せられ、生涯の業として創作活動に取り組むとともに、後継者の育成や、那覇伝統織物事業協同組合（首里織）の設立にも尽力した。首里花織、花倉織、ロートン織、首里拵など多様な技法の研さんと作品制作に、60年以上にわたり誠実に取り組み、その伝統技術を継承している。

さらに、92（平成4）年にはドイツに渡り、ベルリン国立民族学博物館所蔵の「琉球王国時代の染織」に関する調査研究に取り組んだ。沖縄の染織文化を学術的分析によって明らかにし、研究成果を発表するとともに、琉球王国時代の染織技術を復元している。

これらの制作・研究・教育の各分野にわたる長年の功績は、沖縄の伝統文化全体の継承と発展に大きく寄与するものであり、その歩みは次代へと受け継がれる確かな礎となった。

2023（令和5）年には、国の重要無形文化財「首里の織物」各個認定保持者、いわゆる人間国宝として個人認定を受け、90歳を目前に控えてもなお第一線に立ち、精力的に講演活動や後進の指導に取り組んでいる。（花城美弥子）



機織りをする祝嶺恭子=2023年7月、那覇市

仲井間文子

Nakaima Fumiko • 1934-2023

各地の染織で服地を開発 沖縄ファッションの発展に貢献



(2014年9月撮影、琉球新報社提供)

戦後を懸命に生き抜く沖縄の女性たちの「美しく輝きたい」と思う気持ちに寄り添い続けたファッションデザイナーの仲井間文子。沖縄三越専属デザイナーとして長年活躍し、沖縄の染め織り布を使った洋服の制作など、沖縄のファッション界の発展に尽力してきた。

1934(昭和9)年11月24日に大阪府で誕生し、その後、那覇へ移り住んだ。県立第三高等女学校(三高女)の教師だった父・阿波根直成と華道家元池坊の教授だった母・静女の厳しさと優しさにあふれた家族に囲まれて育った。

44年に母の故郷の広島県世羅町へ疎開し、原爆被害の惨状を目の当たりにする。45年8月6日、夏休み中の出校日で拭き掃除をしていた文子はバケツの水面が光る瞬間を見た。その後、山の向こうにキノコ雲が広がりガラス窓には振動が伝わり、どこからともなく「広島市か呉市に何か落ちた」と話す声が聞こえた。翌日には、やけどを負った人々が文子の住む町にも運び込まれ、看護師をしていた母が対応に追われる姿を見ていた。48年に沖縄へ戻るも、焼き尽くされた何も無いグレーの世界に呆然とした。那覇高校時代は自分たちで制服のブラウスなどを作って校章も刺しゅうするなど、物資がなかった時代の沖縄を懸命に生き抜いた。

琉球大学英文科へ入学するも、「技術

を得て、沖縄の女性たちを応援できることをしたい」という思いで中退し、東京の文化服装学院へ進学した。デザイン科を専攻し、那覇の市場で買ったグレー地の木綿のクジリ格子の紺で、サックドレスを制作して高評価を得た。沖縄の素材の着心地の良さのとりこになった。

卒業後は沖縄に戻り、大庭服飾専門学校講師として勤務。「ファッションを雲の上のものではなく、一般人たちのものにしたい」という思いで、59年に大越百貨店(後の沖縄三越)のオーダーサロンの専属デザイナーとして入社した。注文を受けた服を作るだけではなく、婦人服の全体のコーディネートのほか、デパートで買い物しやすい環境づくりにも努めた。

日本デザイナークラブ(NDC)沖縄県会が73年に発足し、ファッションショーの中に「沖縄の染めと織り」の部門を創設した。

85年には県技術アドバイザーとして、服地開発などを目的に芭蕉布や宮古上布などの染め織りの産地を訪れ、沖縄の染め織りの可能性を探った。1980~2000(平成12)年の20年間、ミス沖縄のコスチューム制作を担当。沖縄の素材は着物用のイメージが強く洋服のための布はなかったが、予算が少しずつ増え、夏冬交互に各産地の染めと織りを使用した。

02(平成14)年の沖縄三越退職後も、首里織りなどの県内の染め織物を使った作品を企画展などで発表し続けた。かりゆしウエアの普及に尽力したほか、県ファッションデザイナーの会会長やファッションデザイナークラブ琉球(FDR)顧問を務め、若手育成にも力を入れた。20(令和2)年度県文化功労者としても表彰された。23年11月16日、88歳で死去した。

(宮田麻衣子)



沖縄三越のオーダーサロンのカウンターではほむ仲井間文子(提供)

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

9章



(2025年11月撮影)

比嘉悦子

Higa Etsuko • 1948-

沖縄の歌謡、集落訪ね記録 検証重ね「御座楽」復元も

1948（昭和23）年、比嘉悦子は本部町に生まれ、2歳のころから那覇で育った。久茂地小学校では合唱部に所属。指導にあっていたのは、後に沖縄合唱界をけん引する安谷屋長也だった。妹とともに選ばれ、ラジオ沖縄の番組「沖縄メロディー」で歌うことになる。沖縄民謡を洋楽器で演奏することがまだ珍しかった60年代初期、子どもたちの澄んだ歌声は新鮮な響きをもって電波に乗った。宮良長包作曲の「えんどうの花」や「那覇市民の歌」を歌い、週に一度スタジオで録音する日々。のちに沖縄を離れてからも、自分たちの歌が長年ラジオで流れ続けていたことを知り、音楽が時代を超えて残る力を実感した。

父の転勤で中学時代を兵庫県西宮市で過ごした後、米国民政府の留学制度を利用してハワイ大学へ進学する。当初は英語教師を志していたが、声楽の授業で評価され、音楽へと進路を転じた。音楽が「遊び」と見なされがちだった当時、音楽を職業にすることへの迷いもあったが、「やりたい」という思いを貫いた。そこで民族音楽学と出会ったことが大きな転機となる。沖縄出身でありながら、自身が沖縄の歴史や音楽を十分に知らないことに気づき、「自分の足元を知らなかった」と痛感。さらに民族音楽学の第一人者バーバラ・スミスとの出会いが、研究者としての視野

を広げた。

大学院では沖縄の古典音楽をテーマに修士論文を執筆。夏休みを利用して帰沖し、三線の名人たちを訪ねて録音と分析を重ね、約300ページの論文を英語で書き上げた。67年の渡米から10年に及ぶ研鑽だった。

帰沖後は、各地の祭りや集落を巡り、明治生まれの人々から歌を聴き取るフィールドワークに没頭。学校教育を受けていないと語る高齢の男性が、琉歌や組踊の唱えをよどみなく歌う姿に会い、「生活のなかで歌ってきた人は、いくつになっても歌える」と強く胸を打たれた。そこにあったのは、知識としての音楽ではなく、身体に刻まれた文化だった。

「沖縄の歌謡は生活の一部。最初にあるのは歌で、言葉が先にある」——この視点は、沖縄文化を読み解く大きな鍵となっている。その後、わらべ歌の調査・継

承にも力を注ぎ、NPO法人沖縄児童文化福祉協会の理事長として、子どもたちに歌を手渡す取り組みを続けてきた。

90年代には、王府時代の宮廷音楽「御座楽」の復元にも携わる。数少ない資料をもとに、台湾の楽器製作者と協力し、失われた楽器をよみがえらせた。演奏法も楽譜も残らない中、中国音楽との比較や歴史資料の検証を重ね、復曲を実現。現在も演奏研究会は活動を続けている。一方で、96（平成8）年からは沖縄コンベンションセンター館長として国際会議や沖縄サミットに関わり、沖縄を世界につなぐ役割も担った。研究者、教育者、そして行政の現場へ——その多面的な活動は、沖縄の女性の可能性を体現している。悦子の歩みは、歌声から始まり、文化を未来へ手渡す営みへとつながっている。

（元澤一樹）



ハワイ大学で恩師バーバラ・スミスを訪ねた写真（左から比嘉悦子、大谷紀美子、バーバラ・スミス＝2017年、ハワイ大学）

宮城幸子

Miyagi Yukiko • 1933-

「初心生涯」「芸道無限」 真境名佳子の教えを次世代へ



1933（昭和8）年、羽地村（現名護市）で生まれた。初めて舞台上に立ったのは羽地中学校卒業前の学芸会で、女子生徒らと「松竹梅鶴亀」を発表した。幸子は「梅」を踊った。

「松竹梅鶴亀」は、男性舞踊家玉城盛重（1868-1945）が作った祝儀舞踊で、12年の芝居小屋での初演から発展した。

幸子ら卒業生の踊りを指導してくれたのは当時、那覇から来ていた舞踊家で、「梅」を踊る幸子の素質を見抜いて、「本格的に舞踊を続けたいのであれば那覇に出たらい」と、真境名佳子（1919-2005）を紹介してくれた。

入門当時、幸子は18歳。一生琉球舞踊と向き合っていけるのか、気持ちが定まらないとき、那覇市安里にあった琉映本館の舞台袖で、初めて佳子の「かせかけ」を見た。踊りの最中、衣装のナガサージ（長巾）がほどけるも佳子は泰然として踊り続け、舞台袖からスツと人が来るや、着崩れを直し立ち去った。その自然の所作に心を打たれた。着崩れを直したその人こそ、盛重にも師事した真境名由康（1889-1982）だと後で知った。踊りだけでくみ取れない、心の奥深い世界を垣間見た幸子は舞踊を続けよう決意する。佳子は師事した盛重が戦前から継承してきた古典音楽、古典女踊りの「男性芸」を戦後、女性が踊るとはいえ感情を過剰に

表現せず、骨格を正して踊る技法「ネーチリ入り（着物の揚げ）」で後世へつないだ。ネーチリをたたむ意識で腰を落とす、ふつと息を抜いて芯が通った自然体の構えで歩みを始める。幸子は、「琉舞は歩みに始まり、歩みに終わる。心で踊り、ドウテイサーニウブイリヨー（踊りの型を体にしみ込ませて覚えなさい）」という佳子の舞踊哲学で精進した。

54年、幸子は21歳で沖縄タイムス主催の新人芸能祭で「かせかけ」を踊り、ベストテンに入賞した。受賞者による発表会の盛況は戦後沖縄の人々が芸能を心のよりどころに生き抜いてきた表れであった。同時に幸子にとって舞踊家人生の始まりとなった。

63年ごろ、幸子は同郷の宮城稔と結婚した。稔にとって幸子は、舞踊のほかは眼中にない待ち続けた末の配偶者であった。一男一女に恵まれるも夫の県外異動となるや、幸子は一人那覇に留まり、佳子に付いて舞踊に専従するという家庭生活であった。

古典女踊りの「諸屯」「伊野波節」「作田」の三題を「真踊り」として重視した佳子は68年、琉球舞踊「真踊流」を創設した。同年、幸子へ教師免許を授けている。盛重の男性芸は佳子の真踊りに渡り、次世

代の道を幸子へと拓いた。

幸子は74年、41歳で「真踊流」師範となったが、周囲の後押しで独演会開催を認められたのは50歳の時であった。99年に家元佳子と幸子の名を冠した「佳幸の会」会主を拝命した。2009（平成21）年に幸子は国指定重要無形文化財「琉球舞踊」保持者となり、21（令和3）年重要無形文化財「琉球舞踊立方」保持者（人間国宝）に認定された。ただ、心は19歳の時、新人芸能賞で入賞して以来変わらずにいる。

26年は、幸子が佳子の琉舞研究所に入門して75年になる。「諸屯」の佳子と言われ、今日は「諸屯」の幸子と言われるようになった。「歩みと歌三線が三位一体となった踊り」という思いで92歳の今も現役で舞台上に立ち続ける。「初心生涯」「芸道無限」の佳子の教えを次世代に繋ぐべく、真踊流はじめ沖縄県立芸術大学、国立劇場おきなわ等で後継者育成にも努めている。（伊芸久子）



左から「諸屯」（2007年、国立劇場おきなわ新春琉舞名人選）、「かせかけ」（1954年、新人芸能祭）いずれも沖縄タイムス社提供

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

9章



(2025年11月撮影)

宮里正子

Miyazato Masako • 1948-

琉球漆芸の研究一筋 女性学芸員の先駆け

「私は優等生で歩いてきたわけではありません」一。復帰直後に学芸員資格を取得し、県内の女性学芸員の先駆けに。浦添市美術館で登録博物館では女性初の館長を務めたが、人生の道筋は一直線ではなかった。

1972（昭和47）年に琉球大学を卒業、お茶の水女子大学で研究生となった。「何かやりたいって目的があったわけではなく、沖縄から飛び出したいだけだった」。学芸員資格を取得したのは、工芸品に興味がある正子の資質を見抜いた講師から勧めがあったからだ。

74（昭和49）年に帰沖し、県立博物館の扉を叩くも「女性は採らない」の返事。途方に暮れる正子に、沖縄国際海洋博覧会沖縄館から声が掛かった。「県外の美術館から貴重な作品を借用するには学芸員が必要でしたから。でも、ペーパー学芸員の当人は責任重大ですよ」。新人学芸員として奔走し、徳川美術館所蔵の漆器の貸出交渉も担当。同館館長だった徳川義宣氏と出会ったことが、琉球漆芸研究への道を開いた。徳川氏の沖縄での漆芸調査で助手的な役割を担い、指導や助言を受けたことが後の研究者としての道しるべとなった。

その後、正子のキャリアに14年間の空白が訪れる。海洋博の翌年、正子は結婚し専業主婦へ。義理の両親の介護、3人

の子育てに追われた。80年代に息抜きとして台湾やタイ、ベトナムの工芸産地に子連れで出かけ始め、少数民族の村まで足を運ぶようになった。「子連れで行くと、みんな仲良くしてくれる」。女性たちから温かく迎えられ、東南アジア各地にも漆芸があることを知る。そんな折、90（平成2）年、42歳の時に浦添市美術館が開館し、囑託の学芸員に誘われた。東南アジアの漆芸に開眼した後、漆芸品に力を注ぐ同美術館で8年のキャリアを積み再出発したことが、東南アジアと沖縄の漆芸史の比較研究というライフワークにつながった。

97年（平成9）年、那覇市歴史資料室（後の那覇市歴史博物館）に、琉球国王家の宝物（後の国宝「琉球国王尚家関係資料」）担当の正職員として迎えられた。北京・故宮博物院所蔵琉球関係資料展など海外

展にも尽力し、2009年に定年退職。11年から22（令和4）年まで浦添市美術館で館長を務めたが「きっかけは夫の『あなたがやれば誰でもできる』との意味不明な声掛け」と笑う。正子の生き方には、受動を能動に変える柔軟性がある。楽しむ心持ちを忘れずに、与えられた仕事には懸命に取り組む。

「伸びやかに、しなやかに、そして最後はしたたかに!」を信条とする正子には、影響を受けた3人の女性がいる。画家の父・安次嶺金正さんに嫁いだ江戸っ子の母、名護出身で結婚後も教員を続けた祖母、働き者で知られる那覇東町育ちで教員や立法院議員として活躍した義母・宮里初子だ。社会とキャリアへの意識は祖母と義母、楽しむ心意気は母から教えられた、と正子は話す。（日平勝也）



2003年、ミャンマーのパガン漆学校で調査を行う正子。竹で編んだ籠に漆を塗り重ねる技法である籃胎（らんたい）漆器で制作したソンオク（塔頭形合子）の大きさを記録するため、脇に並び撮影してもらった

山内光子

Yamauchi Mitsuko • 1946-

伝統と自然をファッションに融合 沖縄の服飾文化、世界の舞台で



(2022年頃撮影)

「沖縄の心」をテーマにデザイナー人生を貫く山内光子。故郷やんばるの自然をモチーフにデザインを手掛け、伝統的な染織を現代ファッションに融合させた。

1946（昭和21）年生まれ。国頭村辺野喜で育ち、デザイン描きや洋服作りが好きだった。「イジユの花の周りを舞うチョウを眺めるのが好きで、自然界の色や模様に心が躍った。また、小学生のころ、鹿児島県から来た家庭科教師の手製のワンピースに憧れ、ミシンの踏み方やデザイナーという職業をその教師から教わった。10歳の時のその思い出が私の原点」と話す。米軍基地にあった古着のリメイクを頼まれた経験もあり、「きらびやかな服を作る時間は夢のようだった」と、子ども時代を振り返る。

下に5人のきょうだいがいる長女として父母の力になりたい思いで、親戚の経営する那覇市の飲食店で働きながら洋裁学校など専門学校4校でライセンスを取った。店の常連客だった大学教授の「ファッション界のエキスパートになりなさい」というアドバイスを実践しようと心に誓い、努力を重ねた日々。NDC（日本デザイナークラブ）主催コンテストに応募して以来、計38の賞を受賞し、91年には日本ヴォーグ社賞も受賞した。

「月日が経つのは早く、思い出すのは小学5年生の夏休み。那覇の農連市場で、

咲ききった花が捨てられるのを見た。もったいない、あの花を生かそうという気持ちで、17歳の時にフラワーデザインを習得した」と懐かしむ。市場で集めた花をブーケにする取り組みを展開し、ホテルのブライダルフェアで「沖縄の染織ファッションショー」を開催。回を重ね大きく発展しショーを見た県の関係者の推薦で、89年に沖縄県技術アドバイザーに任命され服地開発を始めた。

また91年のハワイ沖縄センター設立記念のファッションショーを皮切りにロサンゼルス、ニューヨークでもショーを開催。他の地域にも広げショー開催国は28カ国を数えた。沖縄の先人が残した染織が世界で高く評価され、サンフランシスコで開催された沖縄の本土復帰20周年企画のショーには、アメリカ全土から数万人が来場した。「デザイナーたちに『あなたの作品はフランスのエスプリ』と言われた」と振り返る。その状況を県の訪問団長が大田昌秀知事に報告したことで「沖縄の染織を世

界のひのき舞台に上げてほしい」と知事に託され、フランスで学ぶよう勧められた。

その後県の派遣研究員としてパリ・オートクチュール組合学校に入学し、94年に卒業。沖縄の服地を使ったパリ・コレクションの開催を目標に掲げ、フランス日本大使館に協力を依頼。「了解を得て、パリ日本文化会館設立を記念したファッションショーとして、97年のベルサイユ祭で実現した」という。大成功に終わった模様が、NHKワールドで全世界に向けテレビ放送された。またかりゆしウエアの普及にも貢献し、デザインを担当した白化サンゴのパウダー入りの糸で作るエコ素材「サンゴ織」の活用に努める。

2004（平成16）年設立の「株式会社マドンナ」では代表取締役社長に就任後、会長職に就いた。沖縄からファッションの発信を続け、目標は「染織による沖縄ブランドの構築」。山内光子のイマジネーションとデザインで西洋と東洋、そして琉球の服飾文化が調和し花開く。（饒波貴子）



「第16回ベルサイユ祭 沖縄観光・文化・交流キャラバン IN フランス 染織ファッションショー」での山内光子と出演モデル=1997年、フランス・パリ

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

9章



(2025年撮影)

與那嶺一子

Yonamine Ichiko • 1959-

沖縄の染織文化をあすへつなぐ 調査研究、出版、国内外で企画展

與那嶺一子は1959（昭和34）年1月23日、与那国島で両親ともに教員を務める浦添家の長女として生まれ、幼稚園から高校（県立八重山高等学校）までを石垣島で過ごす。

大学進学を考える時期に、テレビでみた型絵染人間国宝・芹沢銈介^{けいすけ}の仕事に感銘を受け、紅型を基盤とするその仕事を知ったことが、沖縄の染織文化を意識するきっかけとなった。

77年琉球大学教育学部美術工芸科へ進学。ここで沖縄織物に大きな功績を残した大城志津子と出会い、学部生・研究生として在学中から、染織資料調査の手伝いをしたり、編纂中であつた沖縄大百科事典で「染料植物」の解説を任されるなど、沖縄染織に関する貴重な経験を積むことになる。

大学卒業後は石垣島で2年間中学校美術教師を務め、結婚を機に沖縄本島へ転勤を希望するが、その配属先となつたのが本人はまったく予想していなかつた沖縄県立博物館であつた。実はちょうどこの頃、博物館が染織担当の人材を探しており、館長から相談を受けた大城が適任者として推薦したのである。こうして84年、首里大中にあつた博物館の学芸員となり、その後、2003（平成15）年から県教育庁文化施設建設室に在籍し、新しくおもしろちに誕生する沖縄県立博物館・美術館（07

年開館）の開館準備に奔走した時期と08年度の1年間糸満市立兼城中学校に赴任した時期を挟んで、長年に渡り博物館学芸員として勤務することとなった。

学芸員となつた最初の年の「博物館だより（研究室の窓から）」に、「重ねた研究をもとに、明日をにう子供達に「琉球文化」を伝えられたらという思いでいっぱいである」と記している。その言葉通り、博物館所蔵の染織資料や県内外、国外に散在する沖縄染織の調査研究を重ねて多くの論文や報告書にまとめ、貴重な現物資料との出会いの場となる展覧会を手がけた。また琉球大学や県立芸術大学の非常勤講師として若者たちと交流するなどさまざまな取り組みに挑戦してきた。08年には、沖縄染織の歴史から現代の染織家までわかりやすく紹介した著書『沖縄染織王国へ』（新潮社）を出版している。

85年の「企画展 紅型衣裳と型紙」か

ら始まり、91（平成3）年「技と美 大城志津子の世界」、12年「沖縄復帰40周年記念 紅型 琉球王朝のいろとかたち」など数多くの展覧会を手掛け、16年から17年にかけてワシントンDCで開催された展覧会「Bingata, Only in Okinawa」では沖縄とアメリカのスタッフたちをまとめる展示作業チーフを務めている。

進行中の琉球王国文化遺産集積・再興事業は、戦後70年の15年から始まり31（令和13）年まで計17年計画で琉球の文化・技術をよみがえらせ、現代のものづくりへ生かそうとするものであり、まさに学芸員として歩み始めた時に思い描いた「子供達に琉球文化を伝える」ことにつながるプロジェクトだ。

先達から受け取った宝物をその両手に抱え、楽しげな声で「沖縄の染織ってすごいんだよ!」と伝えてくれる人である。

（仲間伸恵）



ワシントンDCでの展覧会 binngata 展 展示作業中スタッフ達と記念写真。前列左が與那嶺一子
=2016年10月8日、アメリカ合衆国ワシントンDC

1
章

2
章

3
章

4
章

5
章

6
章

7
章

8
章

9
章

沖縄県は、450年続いた琉球王国の崩壊から沖縄戦、米軍統治、本土復帰へと至る激動の歴史の中で生活様式が大きく変わった。かつて「長寿の島」として知られた沖縄だが、2000（平成12）年には男性の平均寿命が全国26位へ下落し、「26ショック」として大きな話題となる。

長寿の人々は戦前生まれで、イモと季節の野菜、豆腐などの食物繊維や植物性タンパク質が豊富な食生活であった。地域差はあるが、豚肉などの動物性タンパク質を取るのは、年に数回の行事（「正月ツワー（豚）」「十六日祭」「清明祭」「旧盆」など）がある時の数えるほどしかなかったという。冷蔵庫やスーパーが身近にある現代の食生活からは考えられないほど栄養摂取量が異なる。米軍統治下では缶詰などが流通し、食生活も欧米化していた。宮廷料理と知恵と工夫の庶民の料理からなる琉球料理は今、存亡の危機にある。

世界遺産登録目指す

17年より沖縄県は琉球料理伝承人を育成し、味の保存・継承事業を進めてい

る。（一財）沖縄美ら島財団が16年10月に「琉球食文化研究所」を設立。老舗「琉球料理 美榮」に残るレシピや調理工程の記録を行い、有識者ヒアリングで食文化に関わる人物や課題を整理し普及に活用する。24（令和6）・25年、文化庁文化芸術振興費補助金「食文化ストーリー」創出・発信モデル事業に採択され、『琉球・沖縄の伝統的な食文化』調査研究と保存継承・発信事業一祖霊祭祀の行事食と「医食同源」の食思想が根付いた食文化一調査報告書と「食文化ストーリー」チラシを作成し、県内図書館などへ配布した。関係各所と連携し、王国時代から伝わる琉球料理の「ユネスコ無形文化遺産登録」を目指している。

琉球王国時代、料理は外交手段としても重要で、中国や大和との交流の中で技法が磨かれた。国王やその家族、儀式料理は「ホーチュー（庖丁）」と呼ばれる男性が担った。戦後、米軍統治下での物資不足や夫婦共働き、生活改善などもあり、缶詰の普及や年中行事の簡素化が進み、伝統料理にも変化をもたらす。同じ頃、琉球料理の衰退を危惧し、保存に尽力した人々もいた。

研究、普及活動も

那覇琉米文化会館長の城間朝教は、琉球料理研究会を作り、40余名の会員を集め講習会を始めた。田島清郷は、戦前に尚順男爵の松山御殿で得た料理の知識を基に54（昭和29）年から講師に招かれた。講習会を50回以上実施し、『琉球料理』（66年刊）として体系化された。翁長君代は琉球大学で家政学を教え、琉球料理研究と教育の両面で貢献。尚道子は家庭料理の書籍で琉球料理を県外に広めた。63年には新島正子と古波蔵登美が琉球料理研究会を主宰し、首里・那覇の旧家出身者ら20人と試食検証を続け、71年に『琉球料理』を刊行した。

古波蔵は58年に「琉球料理 美榮」を創業し、料理を一品ずつ供するコース形式を確立。外間ゆきが沖縄在来食品の栄養素に関する研究を進め、琉球料理を食品成分表に表した。尚弘子は栄養学から長寿を分析し、多くの学生を育てた。金城須美子は冊封使記録から御冠船料理を調査・再現し、その特徴や系譜を明らかにしたほか膳符日記の研究書も著す。



第500回新報料理講習会で、西大八重子が再現した「松山御殿料理」=2009年（琉球新報社提供）

次世代へ

久場まゆみ(沖縄美ら島財団学芸員)

松本嘉代子は69年に松本料理学院を開き普及継承を続け、25(令和7)年3月に沖縄県より「琉球料理伝承人宗匠」に認定された。安次富順子も御冠船料理を再現し、60年ブクブクザラ発見を契機に、戦前に那覇の女性たち間でカーリーナムン(縁起物)としてお祝いの場などで飲まれていた「ブクブク」を新島と研究した。92年に復活させ、ブクブク茶は25年に文化庁「100年フード」に認定された。また琉球菓子161種の存在も史料研究と王国最後の菓子職人の末裔新垣淑扶らへの聞き取り調査で明らかにする(松本と共に「琉球料理伝承人宗匠」認定)。

西大八重子は新報料理講習会第500回で尚順男爵が好んだ料理を子女から直接指導を受け、レシピに起こし、デモンストレーション調理で再現し話題となる。また「琉球料理 美栄」三代目の古波蔵徳子も94年平凡社の季刊誌「太陽」の特集で尚順男爵の食膳33品を再現した。

王国由来の料理は辻遊郭においても継承された。琉球料理店「當間」を営んだ當間信子はその伝統を深く理解し、新島と古波蔵主宰の琉球料理研究会に助言した。山本彩香は辻に受け継がれたおもて

なしの心と繊細な味を「ていーあんだ」の言葉で表現し、その料理は多くの支持を集めた。また渡口初美は、家庭料理を中心とした琉球料理研究家として、多くの書籍を著しメディアでも活躍した。

今日では学校給食にも琉球料理が取り入れられ、管理栄養士が関わる県内市町村の食育活動も活発である。婦人会の料理書や『おばあさんが伝える味』(79年刊)は「ヌチグスイ(命の薬)」「クスイムン」、「医食同源・薬食同源」など滋味深い伝統の知恵で作られた料理が収められ貴重な記録となっている。

● ● ● 行動、生活に息づく食文化

今でも旧暦の年中行事食は、親族や地域とのつながりを深める大切なものである。「十六日祭」「清明祭」「旧盆」などの行事に供える料理は各家庭で異なるが重詰料理(重箱)も受け継がれる。その時期のスーパーのチラシには行事名や予約受付の文字が躍る。あるスーパーでは常時、方言の部位名が書かれた豚肉が並ぶなど、生活の中に沖縄の特色ある食文化が息づいている。

また、企業の取り組みも沖縄の食文化を支えており、コンビニでは高校生とコラボして作られた県産食材を使ったお菓子や弁当などが期間限定で販売される。近年、県立首里高校のクッキング部が全国大会で入賞するなど、その活躍は目覚ましい。

琉球新報社主催の「新報料理講習会」は68年に「県民の食生活の向上と改善」を目的として始まったが、「食生活の向上に一定役割を果たした」として25年には、57年の歴史に幕を閉じた。沖縄タイムス社グループ発行「週刊ほ〜むぶらざ」など、メディアは長年にわたり琉球料理を取り上げ続け、県民に学びの場を提供してきた。近年は県内外の大学生より琉球料理のデジタル化など現代的な情報発信の必要性が指摘される。企業、メディア、学校、そして家庭。それぞれが琉球料理の未来を支える重要な存在である。そこへのアプローチが肝要である。松本の「味の伝承が大切」という言葉のとおり、琉球料理保存協会が制定した「毎月第3木曜日は琉球料理の日」を実践し、次世代へ味と知恵を受け継いでいくことが求められている。



「琉球料理伝承人」による宮廷料理の展示紹介に見入る参加者
=2019年11月18日、那覇市の琉球新報社(琉球新報社提供)



浦添工業高の調理科がJALJTAセールスとの共同企画でレシピ考案した「まごわやさしい弁当」。県産食材を多用し、パッケージはデザイン科が手掛けた=2022年(琉球新報社提供)